

ハイデ

イ (第九回)

津田芳雄譯

あくる朝、セバスチャンが先生を勉強部屋へ案内して出て来るまで、すぐ又、玄關のベルがけたましく鳴つた。

「あんなベルの鳴らし方をする人は、ゼーゼマン様の外にはない。きつこ旦那様が、不意にお歸りになつたらう」

さう思ひながら、セバスチャンは急いで戸を開けて見るまで、目の前に、汚いぼろぼろの着物を着た小さな男の子が、手風琴を背負つて立つてゐるではないか。

「なんだつてあんな生意氣なベルの鳴らし方をするんだ。この家に何の用だね」

セバスチャンは怒鳴りつけた。

「クララに逢ひたいんだよ」

「この汚らしいさんちき野郎、『クララ』だなんて、クララ様』つて云へんのか。そのクララ様に

一體何の用があるんだ」

「十錢貸しがあるんだよ」

「おやおや、氣でも違つたんだな。それにしても、さうしてこのお嬢さまのお名前を知つてるんだ」

「行きの道を教へてやつたから五錢、かへりに送つて来てやつたから五錢、貸しがあるんだよ」

「嘘もいゝ加減にしろ。お嬢さまは外へなぞお出になることはないんだ。お歩きさへ出来ないんだぞ。さあ、さつさこ——つまみ出されないうちに歸れ、歸れ」

しかし男の子には、そんな脅しは利かなかつた。彼はきつぱりさ、

「だけぞ僕たしかに昨日通りで逢つたんだもの。うそぢやないよ、おぢさん。みんな子か云つて見やうか。黒いちぢれつ毛のおかつばでね、黒い眼

をして海老茶の着物を着て、言葉が少うし僕達と違つてゐたよ。」

「は、はあ、さては又あの山出しのお嬢さんが何かいたづらをおつ始めたんだな」

セバスチャンはさう思つてをかしくなつたが、やがて男の子を中に入れて云ひ渡した。

「よし、わかつた。こちらへ来て、『おはいり』云ふまで戸の外で待つておいで。這入つたらすぐにその手風琴を鳴らすんだぞ。お嬢さまは音楽がこてもお好きだからね」

セバスチャンは勉強部屋へ行つて、

「お嬢さまに是非お目にかゝりたいと申して、子供が參つて居ります」

クララは珍らしがつて、先生におねだりした。

「ねえ先生、すぐお通ししなくちやいけませんわね。そんなにわたしに逢ひたがつてゐるお客様なんですよ」

男の子はもう部屋に這入つて來てゐた。そして、セバスチャンの指圖通り、いきなり手風琴を鳴らし始めた。隣の食堂でお仕事をしてゐたロッテンマイアさんは、この時ふき聞き耳を立て、あの音

は往來から聞えて來るのかしら、それにしては近すぎるやうだけれど、まさか勉強部屋で手風琴を鳴らす筈はないし、だけごたしかに——ロッテンマイアさんは廣い食堂を突切つて大急ぎで勉強部屋さの境の戸を開けて見て、自分の眼を信じるこゝが出来なかつた。部屋のまん中には、汚いぼろを着た子供が力みかへつて、こゝを先途ミ手風琴を鳴らして居り、先生は何か云つてゐるらしいのだが聲が手風琴に消されて聞えない。クララこハイディは面白さうにその音楽に聴きされてゐるのだつた。

「出てお行き、今すぐ出てお行き！」

ロッテンマイアさんは金切聲をあげた。だがその聲は手風琴に吞まれてしまつたので、もごかしがつて子供に飛びかゝつて行かうとした途端、何やら氣味のわるい黒いものが、のろ／＼と足許に這つて來た——それは龜だつた。ロッテンマイアさんは顔色を變へて飛び上り、聲を限りにセバスチャンを呼び立てた。

手風琴弾きの子供は、その聲にびつくりして、あわてて弾き止めた。セバスチャンはさつきから笑ひ轉げながらこの様子を戸のかげからのぞいて

るたのだつた。

「子供も龜も、みんなつまみ出しておくれ。早く、すぐに！」

ロッテンマイアさんは、ぐつたりミ椅子にかけ、息も切れぬに命令した。

セバスチャンに引張られて行く時、子供は素早く龜を拾ひ上げて行つた。門の外に送り出す時、セバスチャンは子供の手に銅貨を握らせた。

「ほら、お嬢さまの借りの四錢を返すよ。それからこれは風琴弾きのお駄賃にもう四錢。上手に弾けたね」

やつミ騒ぎがおさまつて、勉強部屋では又お稽古が始まつた。ロッテンマイアさんは勉強部屋に陣取つて、又もやこの様なさわぎを起さない様に、ぐつみ見張りをしてゐた。ミころがしばらくするに、又セバスチャンが現はれて、誰かがすぐにクララ様に差し上げてくれさ云つて、大きな籠を持つて来たさ取り次いだ。

「まあ、あたしに？」クララはびつくりして、好奇の瞳を輝かせながら云つた。「すぐに持つて来て頂戴。早く見たいわ」

セバスチャンは蓋をした大きな籠を持つて來

て、引き退つた。

「籠よりも、まづおけいこをすませませう」ロッテンマイアさんが云つた。

クララは中に何が這入つてゐるのか見當が付かないので、早く見たくて、そちらの方ばかり見てゐた。文法を習つてゐる最中に、たうさうたまり兼ねて、

「先生、一べんだけ、ちよつこのぞいて見ちやいけません？」

ミたつねた。

「さうですな、一面から考へますミ、お許してもいいです。しかし又、他の一面から考へますミ、お許しすることは出来ません。お許してもよいミ申しますのは、あなたが籠の方へばかり氣を取られてゐられる様では、到底——」

先生はおもむろに云ひ出したが、その演説が、まだ終らないうちに、突然籠の蓋がゆるんで、一匹、二匹、三匹、それから又二匹、又ちよろ／＼ミ、幾つもの仔猫が轉がり出て來て、床の上をあちこちを這んで驅けまはり、目にも止まらぬ早さで、まるで部屋中が仔猫で埋まつてしまつた様な感じになつた。ニャオ、ニャオミ啼き立て

て、引つ掻きつこ、押し合ひつこをしながら、先生の靴をミビ越したり、ズボンを噛んだり、ロツテンマイアさんの着物に這ひ上つたり。足の上を轉がりまわつたり、クララの寢臺に跳び上つたり、それはく大變なさわきになつた。クララは大悦びで、さつきから叫びつゞけてゐた。

「かあいゝわね。なんてきれいなんでせう。ハイデイ、ほら、これごらん、あら、あら、向ふのあれ、あれ見てごらんなさい！」

ハイデイはうれしがつて、あつちの隅からこつちの隅へミ、部屋中を追つかけまわした。先生は困り果ててテーブルのそばに立つたまゝ、氣味わるさうに、かはりばんこに足を持ち上げては、足許をちよろ／＼這ひまわる仔猫から逃げてるた。ロツテンマイアさんは聲も出ない程びつくりして、一步でも椅子を離れては、恐ろしい仔猫が全部一度に飛びかゝつて来ては大變ミ、椅子にしがみついたまゝ聲をふりしぼつて叫んだ。

「ティネットテ！ ティネットテ！ セバスチャン！ セバスチャン！」

二人は飛んで来て、やつミ仔猫を拾ひ集め、籠の中に入れて、先の二匹の所へ持つて行つて一緒

に置いた。

今日もまた、誰も欠伸をしないですんだ。

晩になつて、ロツテンマイアさんは二人の召使ひを呼んで今朝からの出来事をきびしく調べて要るミ、事の起りはすべてハイデイであつて、前の日に街をほうつき歩いた結果であることがわかつたので、眞蒼になつて怒り出した。

「アデライデ、あなたの様な山出しに、二度ミあんな事をしてはいけないことを思ひ知らせるには、穴藏の中へ入れるより仕方がありません。恐ろしい鼠や、まつ黒い甲蟲の出て来る暗い穴藏の中で、よく／＼自分のしたことを考へてごらんなさい！」

ハイデイはそんなにこわい穴藏を見たことがないので、黙つて不思議さうにその云ひ渡しを聞いてゐた。ハイデイが知つてゐる穴藏さいふのは、おぢいさんの家の、新しいチーズやしほり立てのお乳をしまつておく、氣持のいゝ大好きなミころなのだつた。それに鼠だの甲蟲だのさいふものは、ハイデイは見たことがないのだつた。

しかし、クララが泣き出しさうになつて差止めた。

「いやよ、そんなことしちゃいやよ。お父様がお歸りになるまで待つて頂戴、もうぢきにお歸りになるつて、お手紙が來てゐるわ、そしたらあたしがお父様に何もかもお話し申し上げるから、ハイデイのことは、その時お父様が決めて下さるわ」
お嬢様の言葉さあつてはロツテンマイアさんも逆らふわけにゆかず、

「お好きなやうになさいます。でも私からも旦那様に申し上げたいことがありますのよ」

さ云ひすて、つんけんミ部屋を出て行つた。それから二日間は何事もなくすんだが、ロツテンマイアさんの機嫌はなかく直らなかつた。ハイデイの姿を見れば、絶えずデーテにだまされていかものを掴まされた口惜しさがこみ上げて來た。この子が來てからさいふものは、家ぢうのもの何もかもひつくり返つてしまつたやうな氣がして、しかもロツテンマイアさんにはそれをさうにも直しやうがないのだつた。

クララの方はすつと明るくなつて行つた。ハイデイがしよつちう何か彼か氣のまぎれる事を出かすので、もうおけいこも退屈でなくなつたのだつた。ハイデイはいくら教へても字をこつちやに

してしまつて、さうしても呑み込めなかつた。それで先生が、この字は小さな角のやうださか、小鳥の嘴のやうださか云つて注意を惹かうごなさるさ、ハイデイは急にうれしくなつて、「あゝこれは山羊だわ」あれはお山のおつかない鳥だわ」なごま叫び出すのだつた。先生の説明は、さういふいろくなものを思ひ出させるだけで、字は少しも覺えなかつた。

おけいこがすんでクララミ遊ぶ時は、ハイデイはいつも山の様子や、そこでどんなに楽しく暮らしてゐるかさいふこさを、細々話して聞かせた。さうしてゐるさ矢も楯もたまらないやうに歸りたくなつて、おしまひにはきつさ、「もうおうちへ歸るわ、明日はほんさうに歸るわ」さ云ひ出した。クララはその度にハイデイをなだめて、お父様がお歸りになるまでお待ちなさい。お歸りになつたら、よく御相談しませうさ、云つて聞かせた。それをハイデイがすなほに聞き分けて、ぢきに元の元氣になつたのは、一日たてばおばあさんのお土産にさ貯めてゐる白バンが、二つ宛殖えるさいふ祕密のよろこびがあるからであつた。おばあさんは黒バンが硬くて食べられないのに、おばあさんの家

には柔い白バンがないと思ふに、ハイデイは自分で食べる氣になれなくて、今でも御飯の度毎に、こつそりご自分のバンをポケットにしまひ込んでゐるのである。

おひる御飯の後の二時間は、クララのお晝寝の時間なので、ハイデイはその間、ぼつねんご部屋に坐つてゐなければならなかつた。こゝでは山でしてゐたやうに自由に外を走りまわつてはいけないうのださ。いふこは、いやでもわからせられたし、セバスチャンとお話しても叱られるし、ティネットはいやに横柄に構へてつんつんしてゐるしそこでハイデイは所在ないまゝに、家のこゝを思ひ出しては、もうお山ではそこいら中がすつかり青色になつたかしら。黄色い花が咲き出して、雪も、岩も廣々とした谷も、何もかもが暖いお日様にキラ／＼光つてゐる時分だわ。なごご考へ出すさ、歸りたくて／＼ぢつとしてゐられなくなるのだつた。デーテ叔母さんが、歸りたくなればいつでも歸つていゝさ云つた事も思ひ出された。たうさうある日、ハイデイはもうたまらなくなつて、大急ぎで、貯めておいた白バンを残らず赤い肩掛に包み込み、くしやくの麥藁帽子をかぶつて、下へ

降りて行つた。ところが門のまゝころでばつたりさ、丁度散歩から歸つて來たばかりのロツテンマニアさんに出會してしまひ、この計畫もすつかり駄目になつてしまつた。

「何です、その格好は。街をうろ／＼うろつくのぢやないつて、あれほご云つておいたのに、又こんな乞食の子のやうななりをして、飛び出さうごしたりなんかして」

「わたし、うろつくんぢやないわ、おうちへ歸るんです」

ハイデイは縮み上りながら云つた。

「なんですつて！ おうちへ歸る？ あなたはまあ、これでもまだおうへ歸りたいの？」ロツテンマニアさんはます／＼腹を立てた。「こんなにしていて、一體この家のごが氣に入らないのです。且那樣のお耳にでも這入つてごらんさい、勿體ない。生まれからこんな立派なおうちで、こんなおいしい御馳走をいたゞいて、こんなに大事にされて暮したごが、あなたにありますか、えゝ？」

「ありません」

「それ、ごらんさい。ほしいものは何不自由な

くいたゞいておいて、何ミいふ恩知らずなこゝで
す。あんまり十分にしていたゞくので、次のいた
づらのこゝでも考へなければ、するこゝが無いの
でせう」。

するごハイディはたまらなくなつて、この間か
らの悲しさを、一度にぶちまけた。

「わたし、こゝでもおうちへ歸りたいの、だつて、
こんなにな長く歸らないさ、『ゆき』が又泣き出すん
ですもの。おばあさんも待ちくたびれてしまひま
すわ。わたしがペーテルにチーズをやらさないご、
ペーテルは又『ひわ』を打つんですもの。こゝぢや
お日様がお山にさよならをいふのも見られないん
ですもの、お山の大きな鳥がこゝに飛んで來た
ら、きつこ一番大きな聲で、ぎうして人間共はこ
んなこせくした所にかたまつて悪口ばかり云ひ
合つてゐて、氣持のいゝお山の岩の上に來て住ま
ないのか、つて鳴くでせう」

「まあ大變、この子は氣が違つたわね！」

ロツテンマイアさんは薄氣味わるくなつて、あ
わてて引き返さうとした途端、がつしんこセバス
チャンと鉢合せしてしまつた。

「早くあの子を連れておはいり」

痛いおでこをさすりく、ロツテンマイアさん
は階段を昇つて行つた。

「ぎうしたんです。又めんぎうを起したのです
か」

ハイディが悲しさうに、ぢつと動かうごもしな
いので、セバスチャンは傍へ來て慰めた。

「氣にしなくてもいゝのですよ。さあ、元氣を出
して、元氣を出して、わたしをごらんさない。ほ
ら、も少しでおでこに大きな穴をあけられるこゝ
ろでしたよ。お嬢さんはお懶巧で強いんですから
ね。來てからまだ、一べんも泣いたこゝは無いち
やありませんか。仔猫がね、氣狂ひみたいに悦ん
でふざけてゐますぜ。あこでロツテンマイアさん
が出掛けたら、見に行きませうや。ね？」
それではハイディは悲しさうにうなづいただけ
で、元氣なくのろ／＼自分の部屋へ歸つて行つ
た。

その晩、御飯の時、ロツテンマイアさんは一言
もものを云はないで、今にもハイディが突拍子も
ないこゝを仕出かしはしないかミ、ハラ／＼しな
がらハイディの方ばかり見成つてゐた。だが、ハ
イディは急いでパンをポケットにしまつただけ

で、後は身じろぎもせず、一口も食べようともせず、じつと坐つてゐた。

翌朝、先生がお見えになると、ロッテンマイアさんはその蔭に呼んで、急に氣候や暮しが變つたのでハイディの頭が變になつたのではないかいふ心配を打ち明けて、前の日ハイディの口走つた妙な言葉やだしぬけの奇妙な行動をすつかり告げた。しかし先生は、驚くほどのこゝまはないと受け合つて、あの子はたしかに一風變つてはゐるが、精神に異状はなく、注意深く取り扱つてよく仕込んでやれば、きつと落ち著いて来るだらう、今まであの子には、さうしても字が覺えられなかつたが、このお話をも参考にして、益々一生懸命に仕込んで行かうと云つた。

ロッテンマイアさんはこれを聞いてやつと安心した。午後になつて、ふと昨日ハイディがまるで乞食の子のやうな格好をして遁げ出さうと云してゐたことを思ひ出して、ゼーゼマンがお歸りになる時に、もう少しさつぱりした身なりをさせておきたいと、クララのお古をゆづつて著せることを思ひ付いた。クララは快く、いくらでもすきなだけやつておくれと云つたので、ロッテンマイアさん

はまづハイディの持物を検査しようとして二階へ行つた。ところが、二三分もすると、呆れ返つてかんとくに怒りながら降りて來た。

「アデライデ、あなたのだんすの中にあるのは、一體何です？ 著物を入れるたんすの底に、パンを積み重ねておくなんて。ねえクララ様、たんすの中にパンが一ぱい這入つてゐるのですよ、山のやうに！ ティネット、二階へ行つて、アデライデのだんすの中のパンをみんな棄てておしまひ。それから、テーブルの上の古ぼけた麥藁帽子も」

「いやよ、いやよ！ わたし、あの帽子はおいさかなきやいけないのよ。それからパンは、おばあさんのお土産なのよ！」

ハイディは飛び出して行つて、ティネットを引き留めようとしたが、ロッテンマイアさんにしつかりと抑へられてしまつた。今は身も世もあらずクララの寢臺に泣き伏して、切れぐに泣きじやくりながら悲しさうに聲をはり上げて云つた。

「おばあさんのパンがなくなつちやつたア——みんなおばあさんに上げようと思つたのに、みんな棄てちやふんだもの——一つもなくなくなつちやつたア——」

ロツテンマイアさんは、手のつけ様もなく、部屋から出て行つてしまつた。クララはびつくりして、さうしてよいかわからなかつた。

「ハイデイ、ハイデイ、お願ひだからそんなに泣かないでよ。ね、いゝこゝこ、あたしお約束するわ。あなたが歸る時には、きつこあれと同じだけの新しいフカくしたバンを、おばあさんのお土産に上げるわ。もつこ澤山だつて上げてよ。あんなにして貯めておいても、歸るまでには硬くなつて、腐つてしまつてよ。だからハイデイ、もう泣かないでね」

ハイデイはやつこ少し慰められて、

「ほんさうに下さるの？ あれと同じだけ？ きつこね？」

こゝこみ上げて來る悲しさに、こゝもすれば切れぐくなる聲を張り上げて、幾度もこゝこ念を押した。

夕飯の時、ハイデイはまつ赤な眼をして食堂に出て來た。白バンを見るこゝ、又悲しくなつて泣き出しさうになつたが、御飯の時はお行儀よくしてゐなければならぬので、一生懸命に、こらえてゐた。セバスチャンはハイデイの目が合ふ毎に、

しきりに自分の頭をハイデイの頭を指さしながら、何だかをかきな目くばせをした。

ハイデイがベットに入らうとするこゝ、掛ぶさんの下から、あの古い麥藁帽子が出て來た。ハイデイは大喜びでそれを掴み、餘計形のくづれるのも知らず、いつまでもいぢつてゐた。それから大切にハンカチに包み、たんすの一等奥のすみにしまひ込んだ。

その帽子をこゝつておいてくれたのは、セバスチャンなのだつた。テイネットが呼ばれた時、丁度食堂にゐて、ハイデイが泣いてゐるのをすつかり聞いたので、テイネットがハイデイの部屋から帽子をこゝこを持って降りた時、「それはわたしが始末するから」こゝこ云つて取つて來たのだつた。夕飯の時、目くばせをしたのは、一刻も早くこのこゝこをハイデイに知らせたかかつたからであつた。